令和元年度　二学期終業 式辞

二学期を終えるにあたり、三つのことをお話します。

まず、一つ目は先日みなさんに答えてもらったアンケート結果です。「先生や友達は自分の良いところを認めてくれる」と感じている生徒、「学校は楽しく、安心して登校できるところ」と感じている生徒、そして、「自分には良いところがある」と感じた生徒が一学期と比較し増えたことは、大きな行事等を通して成長した皆さんの証として大変にうれしく思います。また、安全に関して、「交通ルールを守ること」や「ヘルメット着用」等、当たり前のことがきちんと意識されていました。ただ、残念ながら地域の方々からは、登校時や、学校に来校された時の挨拶ができないと思われていることも、この機会に伝えます。

気にかかることとして、授業規律の面で、一二年生の意識が下がっていることが結果に表れています。新しい年となり、新しい学期を迎えるこの時に、自分の学び方を今一度振り返り、見直して欲しいと思います。

次に、今年のできごとからみなさんに二つのことを紹介します。

最近「一隅を照らす」と言う言葉を聞いた人はいますか？これは「片隅の誰も注目しないような物事に、ちゃんと取り組むこと」と言う意味があり、天台宗を開いた最澄の言葉です。

一隅を照らし続けた人、中村哲さんがアフガニスタンで襲撃され亡くなりました。連日ニュースで耳にした人も多いかと思います。

医師である中村さんは、アフガニスタンの現状を見て、人々が「三度のご飯が食べられ、家族と一緒に生活できる」ようにしたいと、そのためには「百の診療所より一本の用水路が必要」と、重機をあやつり、干ばつに耐えられるよう用水を作り続けました。中村さんは生前、「お金があれば幸せになれるという迷信、武力で平和は守れるという迷信に惑わされないでほしい。本当に人間にとって大切なものは何なのか、大切でないものは何なのかを考えてほしい」と話していました。

三つ目は、今年の時の人の候補としても名前があげられている、スウェーデンのグレタ・トゥーンベリさんの言葉です。地球温暖化の状況に抗議し、「科学の声を聞いてほしい。」また、「科学のもとに団結し、危機が悪化するのを防ぐために、あらゆる手を打とう。」と訴えています。

事実にしっかりと向き合い、根拠をもとに対策を求める、その彼女の姿からも、先の中村哲さん同様、「本当に大切にしなければならないことは何なのか」と、問われているように感じます。

今日は先に、みなさんのアンケート結果を紹介しましたが、これら３つのことを通してお話したい事は、「まず、今をしっかりと捉えること」「直面している事実から目をそむけないこと」そして、「自らの幸せを求めることは、同時に周りの人々の幸せも保障すること」です。

三年生は進路決定に向け、一・二年生も進級を前にしたこの三学期に向け、是非とも、年の改まるこの機会に、自分自身のしっかりとした振り返りと、新たな年、次への架け橋となる新たな学期に向けての決意と、そのために目指す具体的な姿を描くことを期待しています。

最後に、短い休みですが、十分安全等に気をつけて下さい。そして、始業式、決意を持った姿で全校が集うことを楽しみにしていることを伝え、二学期終業式辞とします。